

# 會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號六第 卷七十第

行發日一月二十年二十正大

## 論叢

土地課稅新案……………法學博士 神戸 正雄  
 價値の量……………法學士 恒藤 恭  
 世界經濟の意義……………法學士 作田 莊一  
 鎌倉時代の土地制度……………文學博士 三浦 周行

## 時論

農民土地愛着心冷却の傾向……………法學博士 河田 嗣郎  
 震災と租稅……………法學博士 小川 郷太郎

## 說苑

マルサスの地代論に就て……………經濟學士 谷口 吉彦

## 雜錄

アダム・スミスの書簡一通……………法學博士 河上 肇  
 「資本と勞働」と「勞働と資本」……………法學士 山口 正太郎  
 リカアド經濟論文集の刊行……………經濟學士 谷口 吉彦  
 名士の死の心理に關する統計的研究……………經濟學士 岡崎 文規

## 附錄

本誌第十七卷總目錄……………

# 『資本と労働』と『賃労働と資本』

山口 正太郎

## 一

マルクスは一八六四年六月三日エンゲルスに宛てた書簡の中で、二三日前、偶然に予の舊稿一八四九年新ライン新聞掲載の「賃労働と資本」、それは一八四七年ブリュッセル労働者協会に於ける講演の筆記であるが、を讀返して、不圖、ラッサールの「資本と労働」(註)別名「パスチア、シユルチエ」の根本思想が殆んど言葉通り、勿論ラッサールにあつては美化されてゐるが、予の前掲書から採り來つたものであることを發見したと云つてゐる。

(註)マルクスは此書簡の中で、ラッサールの書名を「賃労働と資本」として彼自身の著書の題目と同じように考へてゐるが、ベルンシュタインのラッサール全集第五卷には「資本と労働」と題してある、恐らくマルクスが匆忙の際書き誤つたものであると思ふ。

更に、マルクスは資本論初版の序文第一頁の

脚註に、ラッサールの該書に就て、彼の理論的部分、例へば資本の歴史的性質、生産關係と生産方法との交渉等に關しては殆んど予の言葉通り、中には予の創始せし語に至る迄剽竊し乍ら何等其出處を示さなかつたと云つて不滿の意を漏らしてゐる。<sup>1)</sup>

然らば果してラッサールはマルクスを剽竊したのであらうか。此問題を解決するのは容易ではない、唯此處では兩者の類似せる點を舉げて見やうと思ふ。

## 二

資本の意義に就て、從來の經濟學者が、資本とは過去の労働の生産物であり、蓄積された労働であつて將來の生産に對し手段として役立つ處のものであると云ふに反對して、マルクスはニグロイはニグロイだ、紡績機械は絲を紡む機械だ、之等が一定の状態の下に始めて、資本となる。此等の状態から切り離れたならば、金がそれ自身に於て貨幣でないやうに、又砂糖は砂糖の價格でないやうに、それは少しも資本ではな

1) Der Briefwechsel zwischen Friedrich Engels und Karl Marx, herausgegeben von Bebel und Bernstein, 1921. Bd III. S. 165, 166.  
2) Marx, Das Kapital. BdI. Vorwort zur ersten Auflage.

い、と云つて一定の生産關係、社會關係の下に於てのみ始めて資本が發生する事を述べたのに對してラッサールは例を印度人の弓にとつて殆んど符節を合するが如き説明をしてゐる、彼は云う、斯くの如き弓は労働の生産物であり、將來の生産に用ひらるゝが、然し此弓は決して資本ではない、又此印度人は決して資本家でない、労働要具が資本たるためには、一定の生産關係、分業の下に於て、労働者の手にあつて價値の増殖をなすことを要する。<sup>3)</sup>マルクスは、労働能力以外には何物をも有たない一つの階級が存在することが、缺くべからざる資本の前提である、……蓄積された労働が、活きた労働のため、新たな生産への手段として役立つといふことによつて、資本が成り立つのではない。それは、活きた労働が蓄積された労働のため、其交換價値を維持し且つ増加するために手段として役立つといふことによつて成り立つ。<sup>4)</sup>と云つてゐるから資本の意義を論ずる個處に於ては兩者殆んど一致してゐると云つてよい、唯、ラッ

サルにあつてはマルクスが一定の社會的生產關係と云つてゐる點を、稍や具體的に、且つ狭く、分業の生産狀態と限定し、更に、マルクスが該處に於て、云ふべくして、言葉に表さなかつた點、即ち資本は歴史的範疇 historische Kategorie であること云ふことをラッサールは特に大きく讀者の注意を惹くべく書いてゐる。

### 三

資本の意義に就て、兩者の類似は以上の如くであるが次に勞賃に就ても兩者の觀る處、符節を合する如くである。

ラッサールは云うに、商品の市場價格は買手と賣手、需要と供給との關係によつて定まる、供給多く需要少き時は價格下落して、遂に生産費以下となる、然る時は斯る商品の生産に投下されたる資本は引上げらるゝこととなり、從て生産範圍縮少し、供給の減少は價格を騰貴せしむることとなるべく、需要大なる時は又之と丁度反對の現象を生ずる、此際、價格騰落の標準となるべきものは生産の費用である。此

- 3) Marx, Lohnarbeit und Kapital. Neu herausgegeben von Karl Kautsky, 1921. S. 24. 25. 河上博士譯五六頁
- 4) Lassalle, Gesammelte Reden und Schriften. heraus von Bernstein. Bd V. 1919. S. 233—236
- 5) Marx, a. a. O. S. 26. 27. 河上博士譯六一頁
- 6) Lassalle, a. a. O. S. 236
- 7) Lassalle, S. 233

商品の價格を決定する法則は當然に又勞働の價格たる勞賃の決定にも妥當する、蓋し資本主義組織の自由競争の下に於ては、資本家が勞働を見る事商品の如く、而して自己の立場を觀る事、商品の買手、需要者に於けるが如くであるからである。市場の關係は頗る冷酷で、非人情的で、且つ非美術的である、市場に齎される一封度の毛絲はそが美しき娘の手になれると、一日僅かに六片で生活する貧民窟の汚き女工の手になるとには差別を設けない、商品として市場に齎さるゝ勞働の價格たる勞賃は、自由競争の支配する處では常に勞働の再生産費、即ち勞働の生活維持費によつて定まると。<sup>8)</sup>

マルクスは又、商品の價格は如何にして決定せらるゝかと云ふ題目の下に、それは需要の供給に對する關係、提供の要求に對する關係、即ち買手と賣手との間の競争によつて定まる事を述べ、そして、其騰落の標準は其商品の生産費であるを斷じ、さて節をかえて云う。一般に商品の價格を決定する所の、同じ一般法則は、おの

づから又勞賃を、即ち勞働の價格を決定する。勞働の賃錢は、需要及び供給の關係如何により、詳しく言へば勞働力の買手即ち資本家と、勞働力の賣手、即ち勞働者との間に於ける競争の狀態如何により、今騰貴したかと思へば、直ぐに下落する。勞賃の變動は、一般の商品價格の變動に適應する。けれども斯かる變動の内に於て勞働の價格は生産費によつて、即ち勞働力といふ此の商品を生産するに必要とせらるゝ勞働時間によつて決定せらるゝであらう。然らば勞働力そのものゝ生産費とは何であるか、それは、勞働者が勞働者として生計を營むため且つ彼を勞働者に教育するため必要とせらるゝ費用である。<sup>9)</sup>

此最後の點、即ち勞働力の生産費はマルクスにあつては生計費と教育費とであつて、ラッサールでは生計費のみであるようであるが、ラッサールは其個所を異にするに従ひ、或場所では<sup>10)</sup>生計費と云ひ、他の處では<sup>11)</sup>教育費をも含めた意味での勞働力の必要なる產出費と云つて

8) Lassalle, S. 264—271.

9) Marx, S. 19-23. 河上博士譯四二頁——五三頁

10) Lassalle, S. 266, 267.

11) Lassalle, S. 270, 271.

ゐる。以上勞賃決定の法則に就ては兩者に、用語の末は兎に角、大體の意味に於て差あるを認めない、唯ラッサールは一步進めて、子供が工場に通勤する時は父の勞働者は最早、平均的な家族維持の生計費を充分に稼がずして、寧ろ子供に一部分を負擔せしめる、即ち一家族全體として、勞賃は其平均的生計費を獲得するに止まる<sup>12)</sup>と考へたのは事實上、如何であらうか。

#### 四

マルクスは該書に於て、特に勞働の定義を擧げて居ない、唯、それらしく思はれる句は、勞働は、その所有者—賃勞働者 Lohnarbeiter が資本金に賣る處の、一つの商品である。……勞働は勞働者自身の生命の活動 Lebensstätigkeit であり、彼自身の生命の發現 Lebensäußerung であると云ふ點である。

ラッサールは甚だ趣を異にしたる勞働の定義を與えてゐる、彼によれば、勞働とは將來の慾望を豫見し、その慾望充足のため企てられる人類の計畫的行爲を云ふ、従て現在の慾望充足の

ため向けられたる行爲は、勞働ではない<sup>13)</sup>

人類の勞働と動物の行爲との區別は後者は現在の慾望充足に專であるのに反して、前者は將來の慾望を意識して働く點にある、奴隸の勞働は奴隸自身が將來の慾望のため働くのではないから、實は人間の勞働ではなくて動物の行爲なのである<sup>14)</sup>。マルクスは奴隸の勞働をも、人類勞働の一種と看做してゐる事は、彼が「奴隸は彼の勞働(力)を奴隸所有者に賣つたのではない……奴隸は彼の勞働(力)と一緒に、一纏めにして、彼の所有者に賣られる<sup>15)</sup>」と云つてゐるに徴して、明瞭である。

ラッサールは法律の範圍と、經濟の範圍との區別を以て、前者に於ては各人は自己の爲したる事には責任を負ふが、後者では、彼が爲さなかつた事にも各人が責任を負ふものとしてゐる、此點も考へてみると甚だ面白い感がある。

ラッサール全集の編集者ベルンシュタインはラッサールの『資本と勞働』の題名の下に、ラッサールの經濟學上の主要著作と附加してゐる

12) Lassalle, S. 269.

13) Lassalle, S. 40.

14) Lassalle, S. 41.

15) Marx, S. 19. 河上博士譯四〇頁

が、此書はラッサールの他の著述よりも、彼の經濟學の要領を知るに最も適して居り、且つ事實の叙述の部分は殆んど無く、大部分は理論である。此書とマルクスの『賃勞働と資本』とは以上の如く、其骨子とすべき點に於て、甚だ類似してゐる、然しマルクスが言葉通り *wörtlich* に剽竊したと云ふのは如何かと思はれる、唯思想に於て、意味に於てラッサールはマルクスの影響の下に執筆したと云つて大過はなからうと思ふ。

